



カトリック町田教会
町田市の中町 3-2-1
電話 042-722-4504
FAX 042-722-4512

いかにずちの子

<http://www.machida-catholic.jp/>



…光り輝く雲が彼らを覆った。すると、雲の中から声がした、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者。これに聞け」
マタイ17・5

一証に如かず

主任司祭 林 正人

まだ梅雨に入る前のことでしたが、都心に向かう際、些か贅沢をしてロマンスカーを利用しました。町田駅で特急券を買おうとすると、直近の列車は最新型のGSE。しかも展望席の最前列が空いているではありませんか。「これは！」と思い、すぐさま席を確保。ピーポー音を響かせ入線して来た列車に乗り込みました。

前日に陣取ったのは四十数年ぶり。祖父の膝に乗り、江ノ島まで行った記憶が甦ります。ウキウキ気分です。「出発進行！」。しかし、駅ビルから抜け出ると、途端に強烈な太陽の光線が差し込み、出端から景色を楽しむどころではなくなりました。まー、暑いわけじゃないわ！ 眠ることもできない、本も読めない。大きな窓が―勿論、前面はカーテン等ありません―却って仇と

なる、素敵に阿鼻叫喚な三十分を過ごしました。「百聞は一見に如かず」。「快晴時は決して展望席に座ってはいけないう」、新たな教訓を得ました。ところで、件の「百聞は一見に如かず」ですが、我々クリスチャンがこの句を目にする時、自ずと思ひ浮かべる言葉があると思います。それは「見ないのに信じる人は、幸いである」。丸切り反対の、しかしながら何れも真理の言葉。若い頃はこの二つの言葉をどう捉えれば良いのか、結構悩んだものです。確かに私たちは主イエスを肉眼で見ることができません。「見ないのに信じる」以前に、そもそも見るのが叶わないのです。そうであっても、私たちはイエス様を信じています。然すれば、クリスチャンにとって「見る」ことは、己の信仰にとつて何の役にも立たないシロモノなのでしょう。いいえ、やはり「見る」とは大切なことです。「信じる者は救われる」と盲目的に信じて、その信仰は根付きません。では見ることでできないイエス様の代わりに、私たちは何をみつめるのか。それこそが、信仰の先輩方の「証し」です。

時代を生きる弟子たちが己の見える姿、存在を通して、主イエスを「証し」してきました。後に続く弟子たちはその見える証しを通して、キリストへの信仰を心に根付かせて行つたのです。故に、イエス様の「見ないのに信じる人は」との言葉は、「証しを見て信じる人は」と置き換えることができるのではないのでしょうか。百冊の入門書よりも、一人の信者の証しが、後に続く信者の信仰を強めます。いま日本では、戦争を体験した方が少なくなり、その悲惨さを伝える「語り部」が、戦後生まれの方々に引き継が

財務委員会に参加して思うこと

運営委員・財務委員長 鈴木 亮作

2014年4月に町田教会で受洗してから5年、その間に教会の案内の手伝いを行い、昨年より教会財務の手伝いを深く考えずに引き受けました。それで今財務の委員長で運営委員となつていられる状態です。信徒の皆さんの大切な献金により教会が運営できていることを日々実感しながら、財務担当としてどんなことをしているのか、またどんなことを考えているのか、私の視点から少し述べてみたいと思ひます。あくまでも私の視点ですので財務委員の総意とは考えられていると聞きます。直接競争を体験していない人が戦争を語る事ができるのか、そのような心配も巷にはあるようです。しかし我がキリスト教は、二千年も前から、直接イエス様を見ていない人々が「語り部」として証しを行つていられるではありませんか。「伝えるべきこと」は、時代を超え、必ず伝わるのです。そして、伝達を可能にしているのは、受け継がれる「証し」です。「草は枯れ、花はしぼむが、わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ」(イザヤ書四十・八)

ないでください。

今の町田教会の財務体質は健全な運営を行つていと思ひます。特に収入と支出のバランスがよいことと、将来に向けての蓄え(建設費積立)が計画的に実施されていると思ひます。ですがこれでは万全かといえは必ずしもそうではなく、今後の懸念される事項もあります。具体的には、町田教会だけの問題ではありませんが、将来信徒の年齢構成が変化し、それが教会の運営(献金収入等)に影響を及ぼすことになるであろうこと

主日は、テハン神父様司式のミサ、または集会祭儀が行われます。教会聖堂をはじめ施設の維持管理などは信徒会に頼らざるを得ないという事情があるものの、テハン神父様と信徒会との強固な協力体制がうかがえるお話を聞くことができました。

【主催者より】

当日は、林神父様司式の巡礼前の祈りで、灌水・祝福を頂き、男性14名、元氣なフィリピーナ7名を含む総勢60名を乗せた満員のバスは、一路大磯へ。午後、大磯教会では信徒の方にお迎え頂き、駆けつけて下さったテハン神父様の力強いお説教のミサ。ミサ後は木陰のベンチでお喋りしたり芝生で寝転んだり。帰りのバスでは、ビルヘンマハルを歌い、教会に無事帰着。感謝の祈りで盛り沢山の一日を終えました。皆様のご協力に感謝いたします。次回をお楽しみに。

ウエルカムテーブル

黙想会への思い(祈りの力)

藤田 耕一郎

黙想と言う意味を辞書で調べて見ると「思想・世界観をまとめる(深める)ために他との会話や外界との接触を絶ち、考え模索する事(考え模索にふける事)」とあります。

これを私なりに解釈しますと、思想・世界観を祈りに置き換える事であると思います。一般人は社会的な生活に追いまくられて、静かな時間を持ち、考え、黙想する時間がありません。従って黙想会の主なる目的は静寂の中で、自分なりに、自分の進んでいく道を見つけ、祈りかつ修正して行く事にあると思っております。酒井神父さまの講話

「祈りの力」はまさにこの目的に合致するものと考えます。私は恥ずかしながら祈りがなかなか出来ません。他の想念が浮かんでしまうのです。従って酒井神父様の講話を聴いて私の今までの祈りを振り返ってみますと、大きな相違がある事が解りました。今までの私の祈りは自虐的に自分の犯した罪を責め、さらに家族の安寧、夫婦間の幸せ、病気の回復等多分に御利益的なものでした。ここで気が付いた事は、黙想と祈りとは多少の違いがあるにせよ同一ではないかと思いはじめました。

神父様の言う祈りとは、(1)まず前提にあるのが神様への絶対的信頼を寄せる事(2)絶対的な信頼を基本として正直に神様と対話する事が必要!自分の今悩んでいる事、それに対する愚痴や訴え、今の現実を神様に語りかける事

が必要との事です。

(3)次に神様と対話して一つの現実を把握した時、神様に聴く必要があるとの事です。即ち神の言葉に注意深く耳を傾け、神に聴いた事を心に止めて思いめぐらし、その言葉を聴きわけける事です。そして此処まで祈れたら神様に従うという事が大切との事です。従って祈りとは崇高な、次元の高いものではなく、今ある現実を神様と対話する事にあると感じました。

終戦記念日に寄せて

伝道師の父とともに(上)

山口 良樹

1939年正月に、私と母は父伝道師山口良三の赴任先である長岡桜木町教会(福住教会)に移り住みました。

1941年12月に日米開戦となり、教会は主任司祭ホンナツケル神父様がドイツ人で一応平穏でした。しかし教会付属の桜幼稚園は軍国色が入り、1942年シンガポール陥落の祝賀提灯行列に始まり、クリスマス会等の行事の時も、中央に日の丸を掲げて行われました。

1943年戦局も厳しくなり、父もいつ戦地に行くのか分からず、当時軍事工場であった津上製作所に就職しました。だんだん教会に対する締め付けも厳しくなり、神父様や父が外出のときはいつも警察・憲兵の監視付きでしたが、当時他の教会の神父・修道者は一か所に集められ監禁状態だったと聞き、それに比べれば良い方でした。

特別 奇稿

夏の陽によぎる思い出

カルメル修道会 大瀬 高司

高校生の時、由縁は覚えていないが、所属していたクラブで年中行事のように8月1日は海水浴に出かけていた。学期末後、強化合宿明けの行事だったように思う。北陸の海はお盆を過ぎると海水浴には向かなくなるので8月の始めは最盛期で、やがて黄昏れていく夏の陽を惜しみ、また翌日から再開するトレーニングや夏の課題の重々しさやプレッシャーを忘れて無邪気になれるその1日は、気分転換にはちょうど良い機会でもあった。

2年生になるとなぜだか有望な後輩が多数入部してきてクラブは一気に賑やかになった。さぞかし、今年の海水浴は盛り上がるだろうと思っていたら、後輩の一人

が「どうしても行けない」と言う。聞けば、彼の在(田舎の集落)では毎年8月1日の決められた時間に親族一同がお墓参りをすることになっていて参加しないわけにはいかないのだと言う。翌年秋にはキャプテンになる人望者であった上に天然キャラだった彼の「欠席」は大変惜しまれたが、こちらに「参加」すれば向こうは「欠席」となる。彼の家族のお墓参りは生まれた子が新参者として加わり、召された者は欠席となつて毎年顔ぶれが微妙に変わるのとか。ミサの奉仕をするようになってから、夏の暑い日、ふとアタマをよぎる懐かしい思い出。幽冥境を異にしながら参加・交流するミサ聖祭の神秘を有難く思いつつ。

した。

食料や物資の調達が難しくなり、教会での一番の問題はどのようにして毎日のミサのワインを確保するかでした。ホスチアは母が小麦粉を型板で焼いていたのですが、多治見の神言会修道院から送られてくるワインの量が減り、次にいつ送られてくるか分からない状態でした。そこで、日赤病院にお勤めの方から薬の小瓶を30個ほど分けて頂き、それに送られてきたワインを小分けし、毎日数えながらミサを捧げていました。

1945年長岡にも頻繁に飛行機が飛来し、空襲警報の連続でした。教会も聖堂の脇に溝を掘り、大切な聖具や祭服など丁寧に包んで埋めて土を盛り、火災で失われないようにし、庭には近隣の人達も入れるよう大きな防空壕を造り、備えていました。

3月1日の長岡大空襲は天を焦がす炎で本当に悲惨なもので、私たちは防空壕で祈るだけでした。幸い鉄道線路からこちらの桜木町教会は戦火を免れました。【以下次号】

防空壕のアヴェ・マリア

セシリア 金子 サキ

【編集註】金子サキさんが受洗した高田教会(現新潟県上越市)は、戦時中、主任司祭と信者4名が逮捕

され、教会が閉鎖されました。そのため毎週汽車を乗り継ぎ、6時間かけて長岡市まで行き、福住教会に一泊して翌朝のミサに与ると

いう信仰生活を余儀なくされていきました。以下は、こうしてたどり着いた福住教会で遭遇した「長岡空襲」の折の体験記の抜粋です。

《防空壕は横穴式で、伝道師の家族、コックさん、教会近くの人々です。B29飛行機は隊列を組み低空飛行です。

「……」雨あられのように落ち爆発する「焼夷弾の」不気味な響きは、腸がちぎれ、飛び出す恐ろしさです。顔を伏して泣く人、飛び廻るおかしくなった人、これは戦場です。生と死、命の瞬間です。

「……そんな状態のなかで」伝道師の息子良樹君が聖水を瓶から出し、アヴェ・マリアめでたし、と折りながら皆のそばを歩きつ戻りつ、聖水をまいてくれたのです。子供の良樹君の折りが皆に勇気を与えてくれました。純粋な子供の気持ちですが、聖水が自分にかかるのと雨粒程の量ですが不思議な気持ちがあるのです。経験した事のないやすらぎ、誰かの力、守って下さる、皆は心ひとつに、空気が祈りに！ マリアさまが守っていて下さる。あの不思議な聖水の体験はマリアさまの恵みと思えます》

信者動静

2019年5月～7月

(個人情報のため、削除しています)

